

## 緒言

藤林 紀枝<sup>1)</sup>・七山 太<sup>2)</sup>

平成21年9月6日, 日本地質学会岡山大会においてシンポジウム「科学を文化に—学校教育地学分野のこれから—」が開催されました。このシンポジウムには, 9件の招待講演があり, 当初の予想を超える50名以上の参加者がありました。

今回のシンポジウムに関連して我々が特筆すべきことの1つに, 若い人材がたくさん参加してくれたことがあげられます。名簿に記載されているだけでも大学院生10名, 学生2名の参加がありました。この中には教員養成系の学生さんばかりではなく理工学系から8名の参加があり, これは今の時勢を明確に反映していると私達は考えています。また, 若い人が地質学, 地学そのもの, あるいはまた, 教科「地学」の将来に不安をいだいていることの現れともとれそうです。つまり逆に言えば, 地球科学の面白さを, 世の中にもっと浸透させたいと思っている若者が多く潜在するということなのでしょう。

現在, 文部科学省の指針に基づき, 平成25年度実施に向けて理科もしくは地学分野の教科再編が議論されつつありますが, その前に, 今一度, 特に中等教育の教科内容の一部を, もっと物理・化学, 地理学を基礎として取り入れた内容に見直せるのではないかと私達は思っています。

我々は「科学を文化に」シンポジウム世話人として, 前夜行われた夜間小集会共々一連の行事にご参加いただいた皆様に熱く御礼申し上げると同時に, このプロシーディングスを地質ニュース特集号としてまとめ, 皆様にご周知いただくことを企画いたしました。

本特集号の巻頭には, 地学教育問題に対する日本地質学会ならびに日本地学教育学会の対応についてのコメントを, 宮下純夫会長, 牧野泰彦会長からご寄稿いただきました。

文部科学省の新学習指導要領で目指すものについて, 初等中等教育局教科調査官の立場から三次徳二氏(大分大学教育福祉科学部)に, 高等学校教育課程作成の立場から芝川明義氏(大阪府立花園高等学

校)に, シンポジウムでも高い評価を受けた京都地学教育研究会の活動を紺谷吉弘氏(立命館高等学校)に, それぞれの立場でご寄稿いただきました。

杉山了三氏(岩手県立宮古高等学校)には, 長年培われた高等学校教育現場における“地学教育における実験のあり方”について, 特にそのノウハウをご寄稿いただきました。横瀬正史氏には, 小・中学校の若手教員を対象とする千葉県地学教育研究会の取り組みについてご紹介いただきました。

星 博幸氏(愛知教育大学), 玉生志郎氏(産総研・地質標本館), 鈴木隆広氏(北海道立地質研究所), 岡村 聡氏(北海道教育大学札幌校)には, それぞれの機関における地学教育に関するアウトリーチへの取り組みについてご紹介いただきました。七山ほかは, 「地質の日」の地学普及行事の企画実施を例として, 産総研のような公的研究機関, 地方大学と地元博物館の連携のあり方について具体的に示しています。

藤林ほかはアンケート結果をとりまとめて, “教員養成における問題”を, 高等学校や大学における地学専門教員の定数削減のグラフなどで分かりやすく提示しました。佐野 栄氏(愛媛大学教育学部)には, 理科好きの教員を養成するための試みを, 愛媛大学教育学部の取り組みを例としてご寄稿いただきました。

最後に, 長年地学教育問題について携わってこられた矢島道子氏には, 今後の地学教育に関する全般的なコメントをエッセイ風にまとめてご寄稿いただきました。

末筆ながら, 本特集号がベンチマークとなり, 日本の地質“学界”として, より一層地学教育問題について議論が進むことを, 企画者一同, 心から祈っております。

---

FUJIBAYASHI Norie and NANAYAMA Futoshi (2010) : Preface.

<受付: 2010年2月5日>

---

キーワード: 地学教育, 地学普及, 学習指導要領, 教育課程, 地学教育研究会, 教員養成, 日本地質学会岡山大会

1) 新潟大学 教育学部 自然情報講座(地学)

〒950-2181 新潟市五十嵐二の町8050

2) 産総研 地質情報研究部門